

Letters to the Editor 収載

デジタルはアナログを超えるか

秋葉良彦【オーディオ文化と SP レコード】

Audio Amigo Vol.7, P48(1999)より転載

(前略)「良い音」イコール「正直な音」ではありません。正直な音とは、デフォルメのない音のことであり、「良い音」とは聴き手にとって好ましい音のことです。「良い音」とは、各人の感性が介入した言葉ですが、人の好みは千差万別です。価値観は各人で異なります。だから「良い音」の標準化はとても難しい。これに反して、「正直な音」は一つであり、物理的に説明できるものだと思っています。(中略) このように、まさに独断と偏見で装置のチューニングが進んでいきますと、あの凄まじいアンチ純正の世界—デジタルの音も、その質が多少なりとも向上してくるのは不思議です。CD の音も LP の音も同時に向上してきたのです。しかし、向上はしますが、逆転はしません。(中略)

デジタル録音・再生技術は、この SP の気配などに対する高忠実度を、本来備えているように思います。ただ、それが整理されていない。技術的にも文化的にも。いずれは、音楽のすべてを 100 パーセント録音、再生できるデジタル機器が現れて、SP を本当に過去のものとしてしまう日がくるでしょう。私はそう信じています。(1998 年 12 月)

編集者注：Audio Amigo 誌を見ていたら上記記事を見つけました。この記事は SACD 発売前に書かれたものと思われませんが、今日のハイレゾ音源や DSD 音源対応技術への発展、秋葉氏主宰のインフラノイズ社の一連のクロックテクノロジー応用製品や DD コンバーター、DA コンバーターの姿を予見するような内容であったため、許可を得て転載いたしました。